

やはり俺がボーダーな  
のはおかしいのか？

ライとも

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

総武高校2年の八幡は、第1次侵攻をきつかけにボーダーに入つた。  
そこで八幡がネイバーを倒したり、ボーダーで色々したりする物語。  
俺ガイルの話もあるよ！

作者「はつはつはーあらすじ適当でいいません…」

# 目 次

られている

第6話 「息抜きできるゲームってあ

んまり無いよね」

7話 「素直なのはいい事だ」 |

54 49

38

設定、連絡事項など

「キャラ設定など」

1

本編

第1話 「八幡のボーダーでのある1

5

日」

第2話 「八幡はかなり（舐め）腐つて

10

いる」

第3話 「俺：先輩としてガンバレ！」

18

第4話 「クツキーとチャーハンはも

26

う嫌だ：」

第5話 「彼はいつの間にか対戦させ



# 設定、連絡事項など ～キヤラ設定など～

名前：比企谷 八幡

所属チーム：玉狹第一（木崎隊）一応A級ランク外

ポジション：オールラウンダー

メイントリガー

天地（弧月）・旋空・メテオラ・バイパー・アステロイド・ハウンド・シールド

サブトリガー

スコーピオン・グラスホッパー・スパイダー・F R E E T R I G G E

バイパー・ハウンド・バツグワーム

バラスター

攻撃：9

防御・援護：7

機動：7

技術：10

射程：7

指揮：5

特殊戦術：4

トリオン：13

TOTAL：62

戦闘の師匠はレイジさんと迅さんで、戦術は基本我流。

トリオンが出水より高くコントロール力も高いため基本ガンナー用トリガーを使う。弧月は気まぐれに使う。後、那須の師匠的な立ち位置にいる。

最近のブームは全攻撃のメテオラ。（太刀川さんなどからは流星群と比喩されている）もう1つのブームは、『メテオラ』+『ハウンド』||『サラマンダー』にはまつている。：だつて、敵見つけたら追跡してドーンで終わるから楽。 by八幡

林藤さんに頼んで天地（弧月）を作つてもらい現在密かに特訓している。レイジさんと同じようにホルダーを改造したため、スロット数がレイジさんと同じになつた。これを知つてるのは林藤さんとトリガーを作る際に関わつた人だけ。（八幡よく話す人の中では）

基本どの隊とも仲がいいが、特に太刀川隊、那須隊とは仲が良い。 太刀川隊では、国

近さんとよくゲームをして遊ぶ。たまに小南を入れてするが、基本弱く、負けたら国近さん同様めつさめんどい。

那須隊との交流は、非番の日に那須隊（主に熊谷）から那須の家に来いと脅され、那須の部屋に女3人、チャット（女）1人、男1人の状態で話したり、ランク戦について語つたりする。おかげで少し女子の耐性がついた。はず…。

八幡は、年上からは、出来の悪い（主に目が）弟のような感じに見られ、年下からは、少しひねくれた捻デレの兄的な存在。例外として、菊地原と木虎は、めちゃくちゃ生意気で菊地原は何度かフルボッコにした。木虎をフルボッコするのは怖いので「烏丸に報告して、評価を下げるぞ」という脅迫で脅している↑クソですね、はい。

ちなみに学校ではボーダー隊員以外は、八幡がボーダーに入っている事をもちろん知らない。校長は知ってる設定で。ちなみに、八幡くんは、早退、遅刻、無断欠席の元常習犯で先生達から、あまり良く思われてはいない。

総武高校にいる人達♪

1年

菊地原、歌川

2年

八幡、宇佐美、氷見、綾辻、三上、奈良坂、辻

荒船、犬飼	3年
他校の人達↓（八幡がアドレス持つてる人達）	
1年	
鳥丸、時枝	
2年	
熊谷、三輪、米屋、那須、小南	
3年	
影浦、国近、村上	
それより下の学年↓（ry	
木虎、黒江、緑川、日浦	
八幡より年上↓（ry	
太刀川、風間、迅、木崎、嵐山、加古、堤	
八幡の事が好き（？）な人達↓	
国近、那須、小南↑好きな人達	
熊谷↑好き？	

## 本編

### 第1話 「八幡のボーダーでのある1日」

俺は今とても家に帰りたい…家に帰つて小町に癒されたい…仕事したくないよお…  
働きたくない…

「おい、比企谷どうでもいいから働いてくれ…」

「働きたくないっすよ…迅さん」

このぼんち揚げモンスターは迅 悠一。玉柏支部の自称エリート隊員。そしてS級  
隊員だ。

「ぼんち揚げモンスターって何だよ、せめてぼんち揚げマスターと呼んでくれ」

「人の心読んだ挙句に訳の分からぬこと言わぬでくださいよ…帰りますよ？」

「おいおい帰るなよ…後での甘いの箱で送るから」

「迅さん何やつてるんですか早く働きますよ！あ、後、5箱でお願いしますよ」

「5箱…まあ分かつた。とりあえず行くぞ」

「トリガーアクション」



ふい、働いてしまった…まあマツカン5箱と給料が来るなら別にいいか…今何時だ?  
?……げつ! めんどくさいのが帰つてくる…! 早くかえr…

「ただいまー!」

うわ…来ちゃつたよ、帰つて来ちゃつたよ…

オワタ＼( ^o^ )／

「あれ? 比企谷しかいないじゃない、他のみんなは?」

「あー、烏丸はバイトでレイジさんは筋トレ、宇佐美は陽太郎とお出かけだ」

「ふーん、なら暇だから闘いなさいよ」

「うと思つた…こいつ暇になつたらすぐこれだからな…しかも基本俺だけに限定し  
やがつて。いつかギタギタにしたやる…まあとりあえずは、

「すまんな。今日はじいさんの命日だからもう帰るわ」

「え?! そうなの! なら早く帰りなさいよ!」

「わかった。じあまた今度な」

「明日は闘いなさいよー!」

「そうそう、さつきの話全部嘘だから。んじや」ビシツ

「…………!!」

何か言つてるようだが残念もう聞こえないのだよ。

あ、さつきのすぐ騙されるバカは小南桐絵。玉狛第一の戦闘狂だ。あと、声の無駄遣いが激しい。そんなことはどうでもいいんだ、この後は約束があるからブースに行かなければ。

「ブース」

「那須！すまん遅れた」

「ううん、大丈夫だよ比企谷くん」

こいつは那須隊隊長の那須玲だ。めちゃくちゃ美人でボーダーでは結構人気だ。しかし、身体が弱いらしくてトリガードで治してるとかどうとか…まあそんな感じだ。

なんでこんな美人と待ち合わせをしてるのかつて？

「じゃあ、特訓するか」

こういう事だからだ。

‘，模擬戦10本勝負、始め！ビ——’

今回のフィールドは河川敷か…まあボチボチやりますかね

「メテオラ」

ドドドドドドツ

『トリオン漏出過多 那須ダウン』

おつ？適当に撃つたら当たつた。なんか俺のメテオラはよく流星群みたいと比喩さ

れる。さらには、太刀川さんにはウザ過ぎて目が腐りそุดとか言われた。ウイルスじやねえよ。とまあ、そんな筈ないだろと思つて履歴を見たらマジで流星群だった。ごめんな那須。

この後は2本ほど俺がしくじつて結果、8対2だつた。

「うーん…やつぱり比企谷くんは強いね」

「そうか？それより特訓つていう感じにならなくてすまん。」

「いや、気にしなくていいよ！比企谷くんは、小南ちゃんと同じで感覚派なのはもう知つてるから」

「あいつと同じにしないでくれよ…」

「ふふふ、ごめんね。また今度も付き合つてくれる？」

「ああ、分かつてるよ。そうしないと小町がうるさいからな。」「捻<sup>ハシ</sup>デレだね」

「うるせ、捻<sup>ハシ</sup>デレ言うな」

「そろそろ帰らないと行けないと今度ね！」

「おう。」

「ふうー…今日も1日終わつたなあ…家帰つてマツカン飲むか…」

「ひくきくがくやく！」

ビクツ?!……やばい、あの声の無駄遣いヤローがすげえ低い声出してる……相当お怒り  
のようだ……ガタガタ……

「な、何でしようか？小南様？」カタカタ

「なんで、私とのバトルは蹴つて、那須ちゃんとはバトルするのよ!!」  
あつ、終わつた……意識がだんだん、なくなつ、てき、た……バタツ!!  
「ふん！」

第2話 「八幡はかなり（舐め）腐つている」

おっす、おら八幡！今精神的に超死にそう…なんでかつて？こないだ小南のバトル蹴つて那須の特訓を手伝つた事のあれとして殺されます。何回殺されたか聞きたいかい？もう50回は何も出来ずに殺されてます…ダレカタスケテ…

S S S S S S S S S S S S S S

「ふうーすつきりしたわ！また鬭いなさいよね！」

「いや、今回のは闘うつていうか一方的だつて闘いなさいよね?」はい、闘わせて頂きま  
す。」

「小南先輩、比企谷先輩が可哀想ですよ」  
何なのどつからその低い声てるの？アフレコ現場？なにそれちよつと怖いわ～

お、出てきたモサモサしたイケメンこと、烏丸京介。

いつも無表情で、顔の筋肉使ってなさそうで疲れなさそう。なんかいいない

「そうだ、比企谷先輩が可哀想だー」

「比企谷うるさい！」

「なんで俺だけ?!」

いじめ？何なの？俺のこと嫌いすぎるだろ…まあどうでもいいけどね

「そういえば、前に比企谷先輩が小南先輩の事すげえ可愛いって言つてましたよ  
「え？ そうなの！ 何よそれ…／＼／＼

おいおい照れるな照れるな。俺まで恥ずかしくなるだろ。でもまあ黙つてれば可愛  
いよなこいつ、黙つてればの話だがな。

「小南先輩すいません。嘘です」

「え？」

「全部嘘です。」

「また騙したわねええ！」

「うお！ なんで俺を殴るんだ！ 騙したのは烏丸だろ！」

「はははー」

「おいこら、 烏丸！ 無表情で笑つてないで助けろ！」

ギヤ——ギヤ——ワ——ワ——

「おーおー今日も賑やかだなー」

「あ、 迅さんどうしたんつか？」

「ボスが例のものが出来たから来いって言つてたぞ」

「あーあれやつと出来たんですか。 分かりました今すぐ行きます」

「ねえ、烏丸。例のものって何よ」

「あれですよ。比企谷先輩の専用トリガーの事ですよ」

「……ホントは？」

「だから、比企谷先輩の専用トリガーの事ですよ」

「ねえ迅、ホントなの？」

「普段、こいつは信じると騙されるがまた逆も然り、信じないと本当の事なんだよなあ  
……まじで面白いw

「ああ、ホントだ」

「え！ 今回はホントなの?!」

「ああ、ホントだつて言つてるだろ。取つてくるわ」

~~~~~

「ちわーす。林藤さん例のもの取りに来ましたよ♪」

「よし、比企谷来たか。これがお前専用のトリガーだ。」

1つのトリガーが手渡される。

「ありがとうございます」

「早くそのトリガーに慣れるために模擬戦でもしたきたらどうだ？」

「そうっすね：とりあえずブースに行つてきます」

ウイーン

うーん…誰と模擬戦をしようか…小南は、アレだし…太刀川さんとかなら喜びそうだ  
けど俺がきついからな…槍バカ、弾バカ…うーん、すぐ勝ちそうだな（ゲス顔）

「あ！ハツチ先輩！」

「ん？どうした緑川」

こいつはアレだ緑川駿だ。なんか、天才らしくてすぐA級になつたらしい。あとス  
ゲーフレンドドリーだ。うん。面白いやつだ。

「久しぶりに模擬戦しようよ！」

「おう、いいぜ。俺もちようど模擬戦相手を探してたんだよ」

「じゃあ112番に入るけどハツチ先輩は…」

「121番に入る」

「了解！」

トリガーの説明あんまし聞いてなかつたけど何とかなるだろ。

『ねえハツチ先輩！何本勝負にする？』

「あーとりあえず5本で頼む」

『わかつた！』

『比企谷 対 緑川 五本勝負開始ビイー』

うへーなんだこの服装・キリトくんかよつて思うくらいがつたり黒のロングコート  
じやん・絶対動きづらいじやねえか・開発局からのいじめ・権力には勝てねえよ・

「なんだこのトリガー？普通の弧月じやん」

うーん・本格的にいじめられてんのか？泣くよ？俺泣くよ？

「ハツチ先輩！いつまでボーッとしてんの！」

相変わらずちつせーから動きが速いな…こつちはまだトリガーの能力も理解して  
ねえのに、よ！

「え？」

「は？」

『伝達系切断 緑川ダウン』

ただ横に弧月振つただけで緑川が真つ二つになつたんだけど…なにこれ危ねえよ…  
これなら太刀川さんと張り合えるんじやね？K I ・ T A ・ K O ・ R E !

『2本目開始ビイー』

「今度は俺から行くか」

グラスホッパーを使い空中を飛び回るが全然緑川が見つかん。どこだ?  
「おりや！」

ガキンッ!!

なーんてな wちゃんとシールドは張つてますよ。

トリオン少ししか流さなかつたらどうなるんだろうか…

「ふつ！」

「うぐっ…！」

今度は全然切れず、緑川は吹き飛んでいつた。なんだこれ拷問道具にもなつたぞ…俺にそんなに趣味はねえよ…

「ハウンド」

ドドドドッ

『トリオン漏出過多 緑川ダウン』

しかもこのトリガーメインで6個もセットできるじゃん！サブと合わせて10個！  
なにこれ T U E E E !

とまあそんなこんなで5対0のストレートで勝つたが、まだ分からないところが少し  
あるからまた誰かで実験だな（ゲス顔）

「ハツチ先輩！何そのトリガー！強過ぎない？！」

「だよな…俺も軽く引いてるわ」

「今度は10本勝負しようよ！」

「すまんな、一応トリガー使っての報告するつもりだからまた今度な」

「うん、わかつた！今度ね！」

~~~~~

「ちわつす。」

「お、比企谷か。どうだつたそのトリガーハーは」

「初っ端、軽く振つただけで緑川が真つ二つになつた時はかなりビビりましたけど使いやすかつたです。」

「そうか、それは良かった。まあ：楽しんでけよ、比企谷」

うつす

ふう…一応報告もしたし帰つて小町に癒されるとしますかね…。

ハツ！やばいなんか嫌な予感がする…俺のサイドエフェクトがそう言つてるドヤア「比企谷！あんたの専用トリガーめつちや強いらしいじやないの！闘いなさい！」

戦闘狂☆降☆臨！

「疲れたから明日ならいいぜ」

「わかつたわ。明日、絶対よ！」

あ  
あ  
」

はあ疲れた眠いマツカン飲みたい：

帰  
る  
か  
：

### 第3話 「俺…先輩としてガンバレ…」

「ようこそ、奉仕部へ」

何がようこそだコノヤロー。おつと、読んでいる皆さんはなんでこんな感じになつて  
いるか分からぬいだろうから簡単に説明するぜ

平塚先生に課題について怒られる→口挟んだら殴られかける→平塚先生が罰として  
俺を奉仕部へ連れていく→少しこの雪ノ下と話す→クイズを出されたから答えていく  
→そして今に至る。

どうだ！簡単に纏めただろ！さすが八幡、さすが国語学年3位！

「いや、俺、入るつもりないし。てか、入れないから」

「どうしてだ比企谷？」

あれえ？先生、職員室に帰ったんじやなかつたんですか…まあ気付いてたけど

「バイトですよ、バイト」

「はつはつは、何を言うかと思えば、君がバイトだと？そんな訳があるわけないだろう」

「いや、なんで俺の事なのに先生が決めつけてるんですか…」

「…比企谷くん。」

「なんだ？」

「嘘は良くないわ」

……ダメだ……話が通じないようだ。とりあえず、そろそろ任務だな……よし！ 働くかはあ……

「まあ信じなくてもいいんですけど、もうバイトの時間がくるんで帰ります」「ちよつ…待て、…………!!」

何か言つて いるが聞こえない。いや、聞きたくない。

だつて聞いてる暇がないから。遅れたら木虎に怒られる！なんで、年下に怒られなきやならんのだ…

~~~~~

「すいません嵐山さん！遅れました！」

「おう！ 気にしてないから大丈夫だ」

なんて優しいんだ…仮や…ハハアー

「嵐山さん、ダメですよ甘やかしちゃ。」

ははは  
」

「しようがねえじやねえか。先生に面倒事押し付けられかけたんだから」「比企谷先輩自体が面倒事ですよ」

何を言つてゐるんだ。俺は…うん。面倒だな…ごめん。

「そういうな木虎、比企谷も大変なんだよきつと」

「そうちだぞ木虎。そういううちよつかい出すのは俺じやなくて烏丸にしろ」「な、何を言つてるんですか！烏丸先輩にはちよつかいなんて出しませんよ！」

なんかまた怒られた…不幸だああ!! w

「嵐山さん、どうでもいいから早く行きましょうよ。佐鳥と僕が空氣だから」「そうだな、ほら、比企谷も木虎も行くぞ」

「つ…はい」

「うつす」

やつと黙つたか木虎め…今度、烏丸に言いつけて評価おとしてやる…

『比企谷くん、今回はよろしくね』

「おう、よろしくな綾辻」

今、会話したのは嵐山隊のオペレーター綾辻遙だ。正直かなり美人だ。あと、笑顔が  
すげえ可愛い。やだ八幡気持ち悪い…

「んじや行くとしますか…トリガー起動」

~~~~~

ふうー…仕事終わりに飲むマツカンはどうまいものはないなあ…なんかおっさんみ

たい。この後は確か：那須隊の特訓に付き合ったんだつたかな？……うし！もう人働きするか：

「ブース」

「よー那須。」

「あ、比企谷くん待つてたよ」

「比企谷遅いぞ！」

「比企谷先輩！早く早く！」

上から那須、熊谷、日浦だな。もう、説明はカツトの方向で

「わかつたから日浦落ち着け」

ポンッと頭に手を乗せると顔を赤らめて静かになつた。

なに？そんなに頭触られるのが嫌なの？いや、俺が嫌なの？泣くよ？泣いちやうよ？

「ま、まあとにかく比企谷くん、早速だけど特訓お願ひね」

「ああ。今日は3対1でいいぞ。一人一人するのがめんどくなつた」

「それは流石に比企谷先輩でもちよつと：」

「流石に舐めすぎでしょ」

「いいんだよ新しいトリガー使うから」

スロットもフルでうめたからな。まあ3対1で勝てるのかと聞かれたら流石にきつ

いなうん。

「…比企谷くんがそういうならいいけど…」

「んじやバトル形式でするから早く入れよ」

「「うん（はーい）（へーい）」」

サブトリガードラゴン、使おうか迷うな…よし、使おう。

「トリガーリード

はあ…ホントこの服装動きづらいそうだよな… ふうー、頑張ってなれよ…

確か、熊谷がアタツカー、那須がシユーター、日浦がスナイパーか。今回のフィールドは工場みたいな所だから日浦か、那須を最初に潰すか。よし、

「メテオラ」

誰かに適当に当たれ！ただの運任せです。すいません

「…っ！」

当たらなかつたみたいだか熊谷の場所が割れたから作戦は変えるけど攻めますか

「アステロイド」

ドドドドドドツ

「くつ…」

お？シールドで少し防がれたけど左腕落としたし、これは勝ち確定だな

「旋空弧月」

よし、熊谷は落とした。すまんな特訓ならなくて wんで後は那須と日浦か…ボチボチ行くか

「うおつ！」

びっくりしたー高いとこからおそらくだが急にアイビス的なのが飛んできたぞ…日浦こえー何？殺しに来てるの？…まあ弾速遅いから何とかよけられるし、おかげで場所わかつたからいいけどよ

『メテオラ』+『ハウンド』=『サラマンダー』

メテオラの威力を持つたハウンドを放ちすぐに那須を探しに行く

くそ、那須はどこだ…もう日浦は落ちずともトリオンの漏出で動けないだろうから…とか考えてたら那須発見。

「もう熊ちゃん達を落としてきたの？」

「そうだな」

「じゃあ私だけなんだ」

「そういうことだ。遠慮なくやつていいぞ」

「わかつた：バイパー」

来た。那須の代名詞バイパー。正直出水とおなじくらいめんどい。それに多分どこ

かの位置から別の弾道でバイパーが来るんだろうな：ならばこうするしかないだろ！  
「メテオラ！そんで旋空弧月！」

自分自身の周りにメテオラを置くのはかなり危ないが大丈夫だろう。それに弾数が  
圧倒的に違うから相殺以上だな

「…!!…負けちゃった…」

よし！那須も落ちたな。勝てたよ3対1で八幡勝てたよ！補正がかかるのかと  
疑うくらいほぼノーダメで勝てたよ！

その後、3回ぐらい同じ特訓をした。

「ふうー…そろそろ終わるか」

「そうだね終わるつか」

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

いやーすげえ疲れた…マツカン飲みてえ…

「はい、MAXコーヒー」

「ん？おうサンキュ」

「ふはー!!マツカンマジで最高だな！」

「ところでなんで俺がマツカン好きなの知ってるんだ？」

「だって、いつも比企谷くんが飲んでるの知ってるからだよ」

何この人すげえ可愛いんんですけど！危うく惚れる所だつた…さすが俺、理性強し。

「そ、そ…」

「うん…」

なんか気まずいぞ…誰か助けて…

「おーい玲！帰るよー！」

「うん、わかつた！今行くよ」

ナイス熊谷！これから熊ちゃんと読んでやろう！多分殺されるな、うん。

「じゃあまたね比企谷くん」

「おう、またな」

よーし、明日も頑張りますかね

## 第4話 「クッキーとチャーハンはもう嫌だ…」

「なんだ、君は調理実習に恨みでもあるのか？」

調理実習サボったから代わりに家庭科の補習レポートを提出したらいきなりこんな事言われた。なんか前も似たことがあつたような気が…

「先生つて現国の教師のはずじや…」

「生活指導の担当もしているのだよ。鶴見先生に丸投げされた」

職員室の端つこの方を見たら鶴見先生が観葉植物に水やりしていた。水やりより仕事優先しろよ…そんなに植物好きなの？もう植物と結婚しろよ…あ、もう普通に結婚してるんだつけ？…平塚先生え…婚活頑張れ！

「おい。何か失礼な事考えてないか？」

やばいちょ一睨まれてる…ちよつと怖い…まあ二宮さん程じやないがな！あの人はマジで鬼だわ。鬼のお兄さんだわ…

「考えてないっすよ。もうなんもないなら帰つていっすか？」

「ダメに決まってるだろう…それにしてもそんなに班を組むのが辛かつたのか？それとも班に入れてもらえたかったのか？」

何でそんなに心配そうなんですか…しかも結構マジじゃないですか…

「いやいや先生、これは調理実習なんだからより実戦に近い方がいいじゃないですか！だから、1人でするのが正しいんですよ！班で調理実習なんて、おかしすぎる！」

「比企谷、お前の方がおかしいぞ」

「先生！俺の小町がおかしいというんですか！もしそうなら、もはやこの世界がおかしい！」

「訳の分からんことを言つて誤魔化すな」

ありや？バレちつたぜ！てへペろ☆おえ：俺気持ち悪…

平塚先生はレポート用紙を叩きながら、

「おいしいカレーの作り方、ここまでいい。問題はここからだ。なんで玉ねぎを切りながら皮肉を混せるんだ。普通に牛肉混ぜろ」

「なんでそんなうまいこと言うんですか…なんか聞いてるこつちが恥ずかしいっすよ

…

「私だつてこんなもの読みたくない。言わずともわかるだろうが再提出だ」

「うつす」

はあ…やつと終わつた。さて今日は非番だし早く帰ろつと

「今日は奉仕部にいけよ？」

「え？」

「え？じゃないだろ。今日はバイトもないのだろう？」

え？まさか、ボーダーだつてバレたのか？あんのクソ校長め…  
「誰から聞きましたか…？」

「校長先生だよ。バイトの内容までは教えてくれなかつたがな」  
ナイス校長！あんた神だよ神！あなたの家は絶対守つてやるぜ  
「分かりましたよ…行けばいいんですよね…」

「そうだ」

はあ…あの息苦しい部屋に行かなきやならんのか…不幸だ…

部室では雪ノ下が、本を読んでいた。軽く挨拶だけを交わし、雪ノ下からやや距離を取つた場所に椅子を持つてきて腰をかける。そして鞄からボーダー用の携帯を出してB級ランク戦の結果を見始めた。お？那須隊頑張つてるじyan。すると、弱々しいノックの音が鳴つた。

「どうぞ」

雪ノ下は本に葉を挟み込み、扉に向かつて声をかけた。

「し、失礼しまーす」

少し緊張しているのだろうか、声が少し上ずつていた。その気持ちわかるぞ。俺も初

めてボーダーに行つた時そんな感じだつたからな。

そんなことは置いといて、その来訪者は肩までの茶髪に緩くウェーブを当てて、歩くたびにそれが揺れる。また、別の場所も揺れている。どこがとは言わないがな。

俺と目が合うと、ひとつ小さな悲鳴を上げた。

……俺は幽霊じやねえよ…

「な、なんでヒツキーがいるの!?」

「一応こここの部員らしいし」

いや、ヒツキーて誰だよ。そしてこいつ誰だ？

正直俺の記憶にはない。でも、向こうは知つてゐるようだ。だがもう覚えたぞ。その2つの揺れる何かが目に焼きついたとかじやないよ？ホントだよ？

「まあ、とにかく座つて」

さりげない優しさ、まじ俺紳士。べ、別にやましさを誤魔化すためとかそんなんじゃないんだからね！どんなツンデレだよ気持ち悪い…

「あ、ありがと…」

そう言つて彼女は雪ノ下の正面に座り視線を合わせた。

「由比ヶ浜結衣さん、ね」

「あ、あたしのこと知つてるんだ」

「へー由比ヶ浜って言うのか～初めて知ったわ。うん。由比ヶ浜ね、覚えたぞ！」

「それにしてもお前よく知ってるなあ…全校生徒覚えてるのか？」

「そんなことはないわ。だつてあなたの事なんて知らなかつたもの」

「さいですか…」

「そんなに落ち込む必要は無いわ。あなたの存在のなさに気付いてあげられる事の出来なかつた私の落ち度のせいなのだから」

「それ、慰めてるの？むしろ俺が悪いみたいに聞こえるからね？」

「慰めてなんかいないわ。ただの皮肉よ」

「あ、皮肉かあ！玉ねぎと一緒に炒めなきや！え？そこは牛肉だろつて？間違えちゃつた、てへペロ☆

「なんか楽しそうな部活だね。それにヒッキーすぐ喋つてるし」

「楽しそうな部活だと？んなあほな。目え腐つてんじやないの？眼科行つてこい眼科。ぐはっ！」ブームランが帰つてきた：

「そういえば、由比ヶ浜さんもF組だつたわね」

「え？マジすか」

「まさか、知らなかつたの？」

雪ノ下の言葉に由比ヶ浜がびくりと反応する。

「し、知ってるよ？たぶん…」

「それもう知らないことと同じじゃん！」

「今知ったから問題ない」

「…つ。そうだね！」

ただのアホの子だつた。ちよろい。ちよろ過ぎるぞ。

少し落ち着いたのかやつと本題に入りそうな雰囲気だ。

「平塚先生から聞いたんだけど、ここつて生徒のお願いを叶えてくれるとこなんだよね？」

「そうなのか？」

雪ノ下は俺の質問を無視し、由比ヶ浜にこう答えた。

「少し違うわ。あくまでこの部は手助けをするだけ。願いが叶うかどうかは本人次第だわ」

なるほどな。その方法は確かにその人のためにはなるな。俺のためににはならんがな

！

「どう違うの？」

さすがアホの子、聞くと思つた。

「簡単に言えばその人の自立を促す、という感じかしら」

「な、なるほど」

「まあとりあえず話を聞きましょうか」

「あのね、クッキーを…」

「なんで俺の方を見るんだ？俺はクッキーじゃねえよ。かと言つてヒツキーでもないけど

「比企谷くん」

顎で廊下にいけと催促された。

「ちよつと飲み物買つてくるわ」

~~~~~

そんなこんなで今は家庭科室にいる。そして俺の目の前には木炭もとい、クッキー？  
がある。

「これ、ほんとにクッキーなのか？」

「ええ：材料はクッキーだわ。味と見た目は知らないけど…」

「ええ…これ味見すんの？しなくともわかるんだけど…」

「これは不味い」ということが勘でわかつた。

それから何度も作り直したが、やはり不味いものは不味い。

「うう…やっぱり才能ないのかなあ…」

「解決方法は努力あるのみよ。それに、才能がないっていう認識を止めなさい。それに、成功できない人間は成功者の努力を想像することが出来ないから成功しないのよ」  
わお…きついお言葉ですな。由比ヶ浜が言葉をつまらせてるじやん。それを誤魔化すためかへらつと笑顔を作った

「で、でも、みんな最近こういうのしないって言うし…」

「…その周囲に合わせようとするのやめてくれるかしら。ひどく不愉快だわ。」  
うわあ…さすがの俺もドン引きだわ…由比ヶ浜は、気圧されて黙つてるし。

「か…」

帰るとでも言うのだろうか。とてもか細い声が漏れた。

「かっこいい…」

「は?」

おっと、思わず雪ノ下と顔を見合せちまつたぜ。

「建前とか言わないんだね…。あたし、人に合わせてばつかだから、本音を言えるってなんかいいな…」

「ごめん。次はちゃんとやるから」

由比ヶ浜は逃げなかつた。逃げずに自分を変えようとした。おかげで雪ノ下が困つてるぜ w

「まあ、お手本を見せてやれよ」

「そうね。由比ヶ浜さんちゃんと見ててね」

「…」  
だいぶまともにはなってきた。普通に食べるぶんに問題は無い。だが、2人は納得いかないらしい。

「どうしたらしいのかしら…」

「何でだろうね…言われた通りにしてるのに…」

クッキーに手を伸ばし口に入れた。

「うーん…やっぱり雪ノ下のと違う…」

由比ヶ浜は落ち込み、雪ノ下は頭を抱えている。

「…なんでお前らうまいクッキー作ろうとしてんだ？」

「はあ？」

由比ヶ浜さん？人の言つたことをそんな馬鹿な声で返さないでね？気が狂うから

「別にうまいクッキーなんて作らなくてもいいじゃねえか。せつかくの手作りクッキーなんだから、手作りの部分をアピールすればいいじゃねえか」

「そうなの？」

「そうだよ。手作りクッキーなんて渡されたら味なんて二の次だ。手作りだつて事で男

心は揺れるんだよ」

「ヒッキーも揺れるの？」

「あー…どうだろうな、揺れるかもしねん」

「ふ、ふうん」

由比ヶ浜は気のない返事をして、ドアに手をかけて帰ろうとする。  
「自分のやり方で頑張つてみるよ！今日はありがとね、雪ノ下さん！」

エプロンをしたまま帰つていった。

「ほんとに良かつたのかしら」

「いいんじやねえの？本人がそれでいいと思うんなら」

そうして俺達も家庭科室を出た。

~~~~~次の日~~~~~

今日も本やらランク戦の事などを見ていた。すると、こんこんとドアが叩かれ人が入ってきた。

「やつはろー！」

なんてアホそうな挨拶なんだ：さすがアホの子。

「どうしたのかしら？」

由比ヶ浜は鞄の中を「ごそごそ探し始めた。

「あつた！　はい、これゆきのんに！」

由比ヶ浜が1人で作ったであろうダークマターもといクッキーが可愛くラッピングされたものを雪ノ下に渡した。

「あまり、食欲がないからいらぬわ。」

「いやー料理つて楽しいね！　今度、お弁当作つてみるからその時は一緒に食べようね！　ゆきのん！」

「私は1人でたべるからいいわ。それにしても、ゆきのんつて言うのやめてくれるかしら」

「ゆきのん、いつもどこで食べてるの？」

「ここだけど：由比ヶ浜さん、人の話聞いてる？」

「じゃあ一緒に食べようね！　ゆきのん！」

うわあ…一方的にマシンガンのように喋つてるぜ…んじや帰ろ帰ろ廊下に出てから少し経つと、

「ヒツキー！」

「おつと…」

さきほど見た可愛くラッピングされた焦げクッキーを投げ渡された。  
「それお礼だから、あげる！」

一応貰つておこう。後で支部に行つて食べるか。

この後加古さんに、チャーハンを食べさせられ、その後クツキーを食べた。八幡は、3日ほど学校を休んだらしい。

## 第5話 「彼はいつの間にか対戦させられている」

俺は今、玉柏支部でゆつくり、マツカントお菓子を食べたり飲んだりしながらくつろいで居る。いやーやつと完治したよ。何なの?あのゲーテモノチャーハンと、ダークマターは!?おかげで学校3日休んでそこから完治するまで1週間近くかかつたぞ:その間はボーダーにも顔出しできなかつた。する元気がなかつたのだ。ああ:模擬戦しよーゼーとか誰か言つてくるんだろうなあ:嫌だなーめんどくさいなーはあ:誰もないこの空間が至福すぎる…

あつ、誰か来る…お願ひだから小南以外で頼む!!

「あ、比企谷先輩こんにちわ」

「良かつたあ:鳥丸だあ:」

マジで良かつた…これで小南だつたら死んでたわ:

精神的にも肉体的にも…

「そういえば小南先輩、比企谷先輩がいない間凄く寂しそうでしたよ」「あの小南が?」

「はい。比企谷先輩がいない間」

「なんだ？『比企谷先輩のいない間』をやたら強調するな…何でだ？全くわからん。『その代わり凄く模擬戦で三バカ相手に無双してました』

「うへー…そりや大変だな。見つからないようにしよつと」

「そうですね。でも、もうそろそろ来ますよ？」

「マジで！んじやちよつとブース行つてくるわ」

「また後でー」

絶対小南とだけは模擬戦したくない。三バカ相手の方がまだマシだ。したくはないけど…あれ？今日はブースに人があんまりいないな…当たりの日か？

「あ！ハツチ先輩！久しぶり！」

「あ、比企谷先輩お久し振りです」

「綠川はまだいい…何で木虎いるの…別にいいけどさ、めんどくせえ…  
「おう、久しぶりだな」

「ねえねえ！ハツチ先輩！また模擬戦しようよ！」

「またかよ…そんなにしたいなら那須隊相手に勝つてから来いよ…  
…比企谷先輩、それはさすがに那須隊の皆さんに失礼ですよ」

「そーだそーだ！」

「うるせ。言つとくけど那須隊と比べたら俺一人の方が強いんだぞ?」

まあ地形とか、スタート位置が完璧だつたらの話だかな

「え! そうなの!」

「うん、知つてた。このバカの子はすぐ信じるつて。さて、木虎の反応はいかに  
「…じゃあ烏丸先輩としたらどつちが勝ちますか?」

ほう…難しい質問をするじやあないか木虎くん

「うん…多分10本勝負して、6—4もしくは5—5だな」

「そうですか…」

あれ? 落ち込んだ? ゴメンね俺が烏丸より強くつて。

まあしたこと無いからわからんねえけどな

「でもまああれだ。したこと無いからわからんねえよ。小南とならしだことあるけど

「小南先輩の場合はどうですか?」

「えつと…通常トリガーで互いに1点差で勝つか引き分けかだな」

「玉砕支部つて皆さん強いですよね。」

「まあな」

「比企谷先輩は知りませんけど」

あれ? 僕にだけ冷たい…ん? 緑川どこいった? あ、三バカ集まつて遊んでるわうん。

## 放置放置

「そうかよ…ところでさ誰か暇そうな人知らねえか? 2週間ぐらい体動かしてねえから動かしたいんだけど」

「小南先輩とはしないんですか?」

「嫌だね。また死にたくないから」

「ははは…」

「小南とは今一番会いたくない。次は迅さんかな?」

「よう、比企谷久しぶりだな」

「げつ…よりもよってこの人かよ…それにしても餅好きだなこの人…」

「お久し振りです、太刀川さん。ではまた」

「この人も戦いたくない。だつて強すぎるんだもん。」

同じ弧月使ってんのか? つて疑つちやうレベル。

「待て待て。模擬戦相手探してんだろう? ならやろーぜ」

「嫌ですよ」

「じゃあ俺と引き分け、もしくは勝ち越したらマツカン好きなだけ買ってやる」

( ; · · ヂ · ) ナン・ダト! 好きなだけだと…

「やりましょー!」

「よし、本気で来いよ」

「分かりました」

よーしマツカンのために本気出すぞ！でもあれは使わないようしよう。てか、木虎。うわあちよろ過ぎとか言うんじやねえよマツカンだぞマツカン！乗るしかねえだろ！

「トリガー起動」

よし。とりあえず10本勝負だから気楽に行くか。

『太刀川 対 比企谷 10本勝負始めビィー』

始まつた瞬間グラスホッパーで太刀川さんを探し出す。太刀川さんとする時は短期決戦じゃないと絶対に死ぬ。

そう考えながらビルの屋上に止まり、バイパーとハウンドを組み合わせ、サラマンダーを作り出す。そして、それを保持したまま、またグラスホッパーで探し出す。

「お？太刀川さん見つけ」

太刀川さんの事だからどうせ旋空使つてくるかホッパーしながら旋空使うかぐらいいからと予想し、サラマンダーを放つ  
ドドドドドドッ

ん？もしかして1本取った？

「旋空弧月」

うげつ…やつぱりホツパー使つて旋空だつたか。でも手負いだから相打ちだな

「ぐつ…」

「なつ！」

ドドドドドドドッ

良かつたーバイパーの弾道を俺の元に戻つて来るようになつた。でも手負いだから相打ちだな  
本目、結果は引き分けだけど、勝つたな

『2本目始め』

次も俺から行くかバイパーとメテオラ合成つと。弾道的には俺を中心になつた。でも手負いだから相打ちだな  
射。あれだな那須の鳥籠の逆だな。これで太刀川さんが来てくれる嬉しくないんだが  
お、太刀川さんがホツパーしながら來たぞ。手負いじやないつてことは既に近くにいたつてことか…さすが太刀川さん。でも、

「アステロイド」

簡単に取らせませんよ

ガキキキキン

「なつ…」

「旋空弧月」

くそつ…やられた…太刀川さんがシールド使うなんて滅多にないから予想に入れてなかつた…

そんなこんなで現在、3勝4敗2引き分けしていく、負けている。いや、ソロランク1位にこれだけの成績は結構奮闘してるよな…ラスト10本目。近距離戦で勝つてやる

### 『10本目始め』

右手に弧月、左手にスコーピオンを持つて、太刀川を探し出す。

きっと太刀川さんは、弧月二刀流で来るのだろう。はつきりいって二刀流の時の大刀川さんはマジでやばい。頑張ろっと

やつぱり弧月二刀流だつた。あれは広範囲の攻撃もできるようになるからなかなか欠点がない。ん？欠点あるか？まあいいか。

グラスホッパーを使い、太刀川の懐に入りスコーピオンを振るうがやはり弧月で防がれ、もう片方の弧月で追撃されるがこちらも弧月で防ぐ。

俺が太刀川さんの懐に入つたから旋空は使えなくしたが俺も使えないんだよな…だけど、この状況なら機動力はスコーピオンを持っている俺の方が高い。このまま行けば勝てる！

ガキキンキンッ

くつそ：全然押しきれねえ：さすがアタツカー1位だな：しかもすげえ冷静じや  
ねえか：

すると太刀川は弧月を1つだけにし、グラスホッパーでバックステップをし始めた。  
やばい、距離をとられた：こうなつたら

『天地』起動！』

天地を起動すると、弧月の持ち手の部分が長くなる。そして刀身も長くなる。ただそ  
れだけ。それだけだが機動力がかなり上がる。

まずは持ち手の刀身から一番離れた所を持ち、グラスホッパーを使って斬りかかる。  
そして、

「旋空弧月」

遠心力を使つて初速度を上げた旋空を放ち、相手に攻撃のスキを与えないように次は  
天地を短く持つ。よーするにあれば、銀魂でいえば沖田総悟のような戦闘スタイルだ。  
ただ単純に人を狩る。そんなスタイル。

太刀川も最初は驚きはしたが、凄く楽しそうにしている。もう完全に斬り合うつもり  
なのかいつの間にか二刀流にしている。

「旋空弧月」

そして遂に使つてきた二刀流での旋空弧月。火力はあるし、範囲は広いし、マジチ一

ト。だから俺もやつてやる！

「月○天衝！」

天地を腰の所に用意し、旋空の約4倍のトリオンを消費して抜刀する様に振るう。

§ § § § § § § § § §

結果、最後のは引き分けだつた。うわああああああ!!!

あと1勝していれば…畜生…だし惜しみしなければ勝てたのに…

「比企谷、最後のアレなんだ？普通の旋空じゃないよな？」

を流し込んだらあーなるんですよ」

なるほどな…まあそれでも俺の勝ちだがな」

「くつ：じや、じやあまた模擬戦しましようよ次は勝ち越すんで」

—おう！ いつでもいいそ

くつそー：次はぜつて一勝つてやる…あの餅モンスターめ…ていうかよく考えたら太刀川さんにはメリット何もないじやん…ただのバカで優しい先輩じやん…

あ、小町…じやなくて小南! 小南じやなくて小町に会いたい…

「あー!! 比企谷! あんた体調大丈夫なの?! 誰が毒盛つたの! 言いなさい! そいつ殺して

くるから！」

「お、おい落ち着け落ち着け。とりあえず俺の体調は大丈夫だ。んで、犯行宣言やめろ」「そんなことはどうでもいいのよ！早く誰が殺つたか言いなさい！」

「おい、別に俺は死んでねえよ。勝手に殺すな」

「なんだこいつ？マジで怒つてる？ていうか何で怒つてんだよ…わけわかんねえ…」

「ごめん…」

「いつたいどうしたんだ？」

「いや…比企谷の事が心配で…ンンツ比企谷がいなかつたから暇だつただけよ！」

「いや、意味わかんねえよ」

「…もう、しらない！」

えーどつか行つちやつたよ…なんか怒つちやつた…なんか勝手に暴走して消えてつたよ…

「…比企谷くん！身体大丈夫？」

「お！那須か。ああ大丈夫だ。心配してくれたのか…その、なんだ…ありがとな…」「う、うん…」

「誰か助けて…また気まずい雰囲気だよ…カモン！くまちゃん！」

「誰がくまちやんだ…ほんとに比企谷大丈夫なの？」

マジできたし、心読むなよ

「ほんとに大丈夫だよ。どんだけ信じてもらえないんだよ」

「それだけ心配してんのよ。玲も私も」

「お、おう…」

なんか人の優しさをだいぶ久しぶりに受けたから涙でそう…なんだか天使に見えてきた…那須と熊谷は天使だな…」

「え?!」

ん?どうしたんだ?なんか2人とも顔が赤いな…熱か?2人同時に?大変だなあ…

「そ、それじや帰るから、またね比企谷くん…」

「れ、玲待つてよ!じゃあ比企谷また!」

「お、おう…」

なんか顔真っ赤にして走つていったな…お大事に

## 第6話 「息抜きできるゲームつてあんまり無いよね」

『ゲーム』それは基本的に楽しむもの。もしくはそれを使つて勉強も出来る。その人がやりたいと思った時、そのゲームはとても楽しく感じるだろう。しかしどうだ、人から強制的にさせられるゲームはいい気分になるだろうか。いや、ならない。しかもよりによつてしまことのないゲームだ。つまらんことこの上ない。

なんでこんな話をしているのかつて?今、国近さんに呼ばれて太刀川隊の部屋でゲームをさせられているからだよ:しかも朝の7時からずつと2人つきり。何の拷問だよ:なんだよFFつて。俺もこれの作者も内容知らねえぞ:いや待て、作者つてなんだよ。

「比企谷くんまだできるか~い?」

「そろそろ休憩しませんか:もう軽く5時間は続けてますよ:あと、俺、FF全く分かりません」

「え?! FF全く分かんないまま1時間やつてたの?!」

「そうですよ:世界観も操作方法も分からないままで1時間してました。」

「あ~ごめんね:じやあ~何か好きなのしていいよ~」

お！マジか！何があるかなあ……あつ！BLEACHあるじやん。

「BLEACHでいいですか？」

「いいよ～じやあやろつか～」

「いや、先に休憩しましょう。疲れました」

「じゃあ、30分後ね～」

えー…ゲームプレイ5時間に対して休憩が30分つて比率がおかしいだろ…なんだ  
10:1つておかし過ぎるだろ…下手に働くより辛いぞ…くそ～この休憩時間、全部寝  
てやる！

「ふあ～～なんかよく寝た氣がする…」

あれ？今何時だ？…ふあつ?!3時?!あれから3時間寝てたのか…国近さんはつと

⋮

……寝ていらっしやる…。くつ…！ボーダー随一と言つていいほどのその2つの  
山をこつちに見せるんじやない！目が惹きつけられて離れなくなつただろうが！こう  
いうのをなんていうんだつけ…確かに、万乳引力と言つたような…さすが乳一トン先生。  
凄い法則を見つけたな…

ていうかどうしよう。起こさない方がいいのか？

「～～むにや…比企谷くうくん…」

…!?なんだ！って寝言かよ…ん？寝言？夢に俺出てんのかよ…どんだけ俺のこと好きなんだよこの先輩…まあそんなわけないか w

「ダメだよ比企谷くうくん…そんなことしちゃあ…」

ふあつ!?え？夢の中の俺、国近さんになにやつてんの!?今すぐやめて、俺と代われ！

「そんなことしたら…壊れちゃうよお…」  
え?!マジでなにやつてんの？壊れちゃうつて主になにが!?国近さんがなの？そうなの！?

「ああ…ゲームがあ…比企谷くうんめ…スヤー」

なんだ…ゲームかよ…いや、べ、別に変なことなんて考えてないよ？ホントだよ？  
それについてもこの人寝顔可愛いな…写真に撮つて出水に自慢してやろーっと  
パシヤ!!

よし、撮れた撮れた。

「ううん…あれ？…ゲーム壊れてない…良かつたあ…今何時だろう…」

「今は3時20分ですよ」

「3時過ぎかあ…。…3時過ぎ?!え？比企谷くんほんとなの〜？」

この人喋る時、間延びするから急いでるのかわからねえよ…

「ホントですよ」

「あちやー…お昼食べてないよね…」

「あー…食べてないっすね。寝てましたから」

「じゃあ鍋食べる?」

「な、鍋か…食べたらもう晩ご飯になりそうだな…」

「な、鍋つすか」

「うん。鍋だよ。家族が送つてくれるんだー」

「そうつすか、じゃあ食べましょか。鍋」

「ここはなんとなくだけど折れて食べたほうがいい気がする。たぶん、1発目に鍋が出てくることから予想して鍋以外出来ない気がするよこの人。

「わかつたー準備するから待つてねー」

「うつす」

なんか新婚みたいだなあ…いいねえこういう感じ…でもなあ、鍋だもんなあ美味しければいいかあ…ダークマター食べさせられるよりマシだな。うん。

「準備できたよーさ、食べよ」

「うつす…つて結構本格的な鍋つすね…うまそうです」

「そーかなー」

「そうですよ。じゃあいただきます」

「はい、いただきまーす」

ふうーふうー……あちつ……猫舌にこの熱さはなしだろ…  
はふはふ…むぐむぐ…やべえ超うめえ…この鍋食べるためにしてここに通うまでもあるな  
…。

「どう? おいしい?」

「はい。めちゃくちやうまいっす。これ食べにここに通うまであります」

「おお! 何なら私がそつちに通おうか?」

「そ、それはなんか国近さん、通い妻みたいじやないっすか…こつちが恥ずかしいっすよ  
…」

「か、通い妻…//」

「あ~すいません! も、もう用事あるんで帰ります! じ、じゃあまた今度!」

「う、うん…//」

やばいマジで恥ずかしかつた…ダメだ家帰つて寝よ…

## 7話 「素直なのはいい事だ」

どうも久しぶりの八幡だ。自分が何をしていたかあんまり記憶に無い。一番新しい記憶といえば約1ヶ月以上前に国近さんとゲームした事だな。ん?メタいつて?作者が悪いからな、しようがない。文句はたくさん言いたいのだが、そろそろ本編に入ろう。

もう嫌だ:仕事したくない:何もしたくない:布団から出たくない:

「おにいちゃん!早く起きろー!」

ああ:小町の声がする:早く起きないとな:しんどい:

「ごみいちゃん早く起きてよー」飯冷めちゃうよ!

うう:起きないとな:

「ふあー:おはよう小町」

「おはよう:じゃなくて、早く」飯食べなきや学校遅れるよ!」

「おう」

洗面所で顔を洗つて、リビングへ行くと朝ごはんが置いてあり、小町は既に食べ終わっていた。

「ん？…小町ちゃん？何でこんなにもトマトが多いのかな？」

「何でつて、なんとなく？」

「うわ…なんとなくでお兄ちゃんに嫌がらせしてくるなんて、小町ひどい子！そんな子に育てた覚えはありませんよ！」

「お兄ちゃん、とりあえず早く食べてよー」

「わかった」

モグモグモグモグモグモグウメエー

「お兄ちゃん、今日はこれつける日でしょ？」

と、黒い菱形のネックレスが渡される。

「…もうそんな日か」

このネックレスは、4年半前に第1次大規模侵攻によつて親父が死にかけて、トリオンを凝縮させ出来たものだ。つまり、『黒トリガー』だ。普段は小町が持ち歩いているのだが、命日の日だけは俺こと八幡が持つことになつてゐる。

「じゃあとりあえず学校行くか」

「うん！」

（～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～）

時は流れて 『ボーダー本部』

あれ？学校の描写は？え？ないだつて。俺のボツチタイム描写してもつまらねえからだと…まあ確かにそうだけど、手抜きは良くないな。ネタが無いことだけはよくわかつた。

「ふあ～…眠てえ…」

今日は誰とも何も約束してねえからすること無いな。いや、むしろ何もしねえのを推奨するが。人のランク戦でも見ながらマツカンでも飲むか。

「あれ？比企谷先輩何してるんですか？」

「ん？なんだ双葉か。いや、あの馬鹿どものランク戦見てるんだよ」

「私も一緒に見ていいですか？」

「ああいいぞ、マツカン飲むか？」

「貰います」

双葉はマツカンの事悪く言わねえし、よく飲むからいいやつだよなあ：それに結構強いしな。緑川の幼馴染みつてのが可愛そうだけど。

「比企谷先輩、そのネックレスどうしたんですか？彼女からですか？」

「彼女いねえからそんな訳ねえだろ。これは親父の形見だよ」

「…なんかすいません聞いちゃダメでしたね」

「いや、大丈夫だよ、気にすんな」

「はい」

「ああ…やつぱり双葉はいいやつだよなあ…こんな感じの妹もいいよなあ…」

「比企谷先輩、声に出てますよ。あと、恥ずかしいからやめてください」

あら？ 声に出てたの？ すまんな。てか、恥ずかしいってマジかよ…なんか俺も恥ずか

しくなってきた…

「お、おう。すまん」

「そうだ、比企谷先輩」

「なんだ？」

「この後、私と模擬戦しましようよ」

「ああいいぞ、どうせなら緑川と組んで来いよ」

「わかりました、呼んできます」

と言つて緑川のとこにかけていった。

「はあ…遊んでやるか」

この後、双葉＆緑川相手に8—2で圧勝して、追加でもう10戦し、また同じ結果で勝つたとさ